

恥

森素 緑

今回の“楽書帳”のタイトルが“恥”についてと云われて、はて、何を書こうかな、私も何時も恥をかいてばかりいるので、ここで、はじめて真面目に“恥”に関して、言葉の意味やことがらについて追求してみたが、調べれば調べる程、この恥というものは哲学的で奥が深いと実感した。

そこで基本にかえて辞書をひいてみた。

国語辞典によれば、恥という意味は、名誉や面目を失うこと、と書いてある。

恥をつかった語句には、恥じをかく、恥じをさらす、恥じを知る、恥じ

さらし、恥じしらず、などがあります。

恥という漢字は耳と心をあわせたもので、耳で聴いたり、目で見たりして心で恥を感じるものである。

子供の頃、親や先生、友達、知人、から教えてもらった、道德、名誉、面目、常識、などを、尺度、にして、この尺度からかけはなれた時に心で感じて興奮し赤面することではないでしょうか。

人はそれぞれ、生まれた環境、教育、しつけ、常識、道德感、など

はちがいますので、人それぞれによる恥じの感じかた、感じる度合もちがう。

また、人によってはおなじ行為でも全然、恥じとおもわない人もいる。

こういった、恥じらい感は後天的に、しつけや自分の経験によって自然に育まれた感性であるが、生まれながらもって生まれた恥じらいというものもある。

たとえば、ある種の動物は排泄しているところを見られたくなく、隠れて排泄する。これは明らかに、生まれながらに持って生まれた本能すなわち、恥じらい本能がこの動物にあるからです、動物に限らず、これと同じことが、人間にもあるのではないのでしょうか。

もちろん動物のこの行為は防御保護本能ということも考えられますが、恥じらいがあることも確かである。

ある時、誰もいないカプセルに一人ではいった生活をすると仮定しよう。勿論このカプセルは誰も見てなく、誰にも知られない秘密の場所としよう。この時、この人の行為は最初は少しのためらいで、ある種の道徳的な生活をするが、だんだん原始的な生活に入り、それとともに、恥じらなどの感性は失っていくものです。

このカプセルに二人で入ったと仮定しよう。この時も一人の場合と同じ

ように最初は恥じらいを感じるが少しずつ、慣れることにより、恥じらいは消えてゆくものである。

この様に、恥じらいは、慣れにより徐々に無くなるものである。

我々は日常生活において、知らず知らずの中で恥じらいを失っていないだろうか？

夫婦生活においても然り。この恥じらいは、年すなわち老いとともに失ってゆくものである。

恥じらいは人間の美德の一つであり、この恥じらいを失くした人は図々しい奴となり、人は、このような人から遠ざかるものである。

恥じらいをもっているひとは、美しい。いつまでも、この恥じらい心をもちつづけたいものです。

特に女の人には？？？

この恥じらいというものは、先天的にもまた、後天的にも遺伝子すなわちDNAに恥じらいメモリーというものがあり、インプットされるものではないのでしょうか？

あなたは次のようなとき恥じらいを感じますか？

- *男の人が間違っって女の人トイレに入ったとき
- *電車のなかで、うっかりXXをしてしまった
- *大衆の面前で裸になる
- *皆が出来るのに自分一人だけが出来なかった
- *会社などで仕事をして何も出来ない、またやる気のない人
- *会社で月給泥棒といわれている人
- *自分の欠点を指摘されたとき
- *浮気がバレたとき
- *結婚式と葬式を間違ったとき
- *夏服と冬服を間違っって着たとき
- *親の前でXXの話をするとき
- *自分がわからないくせに、自分がわからないと素直に云えなく、知ってるふりをする
等など

これらは会社の社員からとったアンケートの一部であるが、恥というものはまわりの環境、年代、それぞれの立場、その状態、により感じ方、感じる度合も異なる。

又、感じる度合はその人の感性による。この感性は先天的に鈍い人もいる。

しかし、恥じのことだけを考えていれば臆病者になり、何も出来なくなってしまふ。

ある時には、恥じを許し、恥じを忘れることも重要であろう。愛情があれば、この恥を忘れたい、恥じを感じない時があるろう。愛情、欲望が恥ち心をこえるときがある。

恥を許さず、道徳だけで生きてゆけば、愛は無くなるものである。

全く、この恥というものは不可解なものである。